

平成 29 年度 参観日 校長講話「親が子どもに残すもの」

今日は、「親が子どもに残すもの」というお話をします。

最初に絵本の読み聞かせをします。子どもになったつもりできいていてください。

【わすれられないおくりもの】

アナグマは動物たちの友だちでした。子どもたちにとって、アナグマ役割をするのは、友だちであり、時には教師です。でも一番は親だと思います。

子どもは成長して、やがてひとり立ちをします。その時、親は見守ることしかできなくなります。また、最後まで親がわが子を見届けることもできないでしょう。その時に、困らないように、もし困っても乗り越えていくことができるように、そしてしあわせな人生を歩んでいけるようにしてあげるのが親の役割であり、願いでもあります。

アナグマは、ひとりひとりに、別れたあとでも、たからものとなるような、知恵や工夫を残してくれました。アナグマの残してくれたものの豊かさが、みんなの悲しみを消してくれました。

子どもたちにどんなたからものを残したら良いのでしょうか。多くの子どもたちをみてきた教師として、一人の親として私の考える宝物のお話を3つします。



一つ目：「しあわせとは何か」を示してあげること、体感させてあげる。

私が思う幸せは、人に「何かをしてあげる」ことで、その人が喜ぶ。その喜んだ顔を見た時に、自分が幸せになる。私はこれを「あげるしあわせ」と呼んでいます。たかはしけいこさんという方が使った言葉です。この「あげるしあわせ」のできる人は、周りから感謝され「ありがとう」とたくさんの人に言われて自分に自信がつきます。気持ちの良い人がまわりに集まってくる。そういう人と過ごすようになるからどんどん人生が良くなります。この「あげるしあわせ」と同じ事をアンパンマンの作者のやなせたかしさんも言っていました。「人生の楽しみの中で、最高のものは人を喜ばせること」だと。私は子どもたちに、校長講話や卒業式で伝えてきました。本当にそう思うのです。

だから、子どもたちには、人にしてあげて、その人の喜んだ顔を見て本当に良かったなあと実感できる経験をたくさん積んで欲しいと思います。家族でもお友だちでも誰かのために何かをしてあげたら、うーんと喜んであげてください。たとえうまくできなかったとしても、喜んでもらったり褒めてもらったりしてうれしかったーという経験を子どもたちにはたくさん積んで欲しいと思います。

二つ目：お父さんなら・お母さんならこうするだろうというものを残す。



保護者の皆さんは自分が困ったとき、失敗したとき、いくら考えても結論が出ないときどうしているでしょうか。私は「父ならどうするだろうか。母ならどう思うか。」学校の事なら「〇〇先輩だったらなんて言うだろうか」と考えることがたびたびあります。特に父は20年も前に亡くなり、普段は思い出すことはないのですが、こういうときにふっと現れます。というよりも、私の心がそういうピンチの時だけ助けを求めるのでしょう。

「こんなときにはこうしていきなさい」というような指針となるものを子どもに残してあげて欲しいと思うのです。

三つ目：愛されたという記憶です。自分がかげがえのない存在である、愛される存在である。という満ち足りた気持ち。です。ある詩を紹介します。1年生の保護者のみなさんの記憶に残っていたら、嬉しく思います。

【君がママのお腹にいるとわかったとき】

子育ては、嬉しいときもありますが、思うようにいかないこともたくさんあります。「どうしてこうなの」「あんなに言ったのに」と心が乱れたり、時には叱ったりしなければならないこともあります。でも根っこに、「あなたはかけがえのない存在なんだよ」という思いが伝わっていれば大丈夫です。そして、自分は愛されている、愛されてきたんだというものがあれば、困難な場面に直面しても自分を大切に、周りの人も同じように大切に、乗り越えていくことができると思うのです。